

令和3年度 第1回松本市基幹博物館1階活用市民会議 議事録【公開用】

1 日 時 令和3年7月13日(火) 午後1時30分～3時30分

2 場 所 松本市立博物館講堂

3 出席者

委員 益山委員長 山村職務代理者 金井委員 川船委員 長谷川委員 渡邊委員
事務局 臥雲市長

(教育委員会)伊佐治教育長 藤森教育部長 木下博物館長 中原建設担当課長
百瀬庶務担当補佐 三木建設担当補佐 千賀主任

(文化観光部)小原文化観光部長 小口観光プロモーション課長

傍聴者 報道関係

4 会議の概要

開会

市長あいさつ

こんにちは。お忙しいところお集まりいただきまして誠にありがとうございます。松本市の基幹博物館は、令和5年の秋、あと2年後に、開館という予定で現在、建設工事・展示制作を押し進めているところであります。そしてこの基幹博物館、松本城へと続く、松本市の中でも、最も賑わいと、そして市民の憩いにとって非常に重要な場所に建設をされるということであり、この松本城周辺につきましては、三の丸エリアビジョンということで、この夏から専門家の皆さん、市民の皆さんを巻き込んで、これからのお城周辺のあり方を総合的に検討して、計画を今作ろうとしているところでございます。その中において、この基幹博物館、こういうものも、お城周辺のまちづくりという観点で、非常に重要であると考えておりまして、従来の博物館の社会教育的な側面、それとあわせて、文化観光的な側面を入れることを、ぜひ皆様から活発な意見をいただいて、考えていければと思っております。国としても、昨年5月に文化観光推進法というものを施行して、この文化施設が、地域の観光、文化資源の紹介や積極的な情報発信を行うことによって、さらに、文化の充実、発展につなげていくと、そうした考え方が、コンテンツとして打ち出されております。今回お願いいたします博物館の1階部分、こういうものにつきましては、今申し上げた、社会教育的な観点と文化観光的な観点、双方の観点から従来の枠にとらわれない様々な活用のあり方というのを検討して参りたいと思っておりますし、そのために、活発なご議論をお願いできればというふうに思っております。よろしくお願いいたします。

委員紹介

事務局紹介

委員長・職務代理者選任

議事

ア 基幹博物館の整備概要について(事務局による資料1の説明)

(ア) 整備スケジュールについて

(イ) 建物の概要について

(ウ) 展示製作の概要について

イ 意見交換

委員長 整備スケジュール・建物概要・展示概要について詳細にわたり説明いただきました。こちらの内容についてご意見、ご質問等あれば、委員の皆様からの挙手をもってお願いします。

A委員 運営形態について確認させてください。新聞等で知っている範囲では、美術館・松本城が文化観光部、博物館は教育委員会という切り分けが令和3年4月からと認識しています。今後、どのようなことが想定されるのでしょうか。もっと端的に言うと、議題となっている1階部分のある種の活性化はどの部局・部課が担うかでだいぶ性格が違ってくる気がするのですが。

中原課長 博物館については、1階もふくめて博物館の所管となります。教育委員会が中心となって担うということです。

小口課長 運営については中原課長のいったとおり博物館が主体となりますが、文化観光部として組織は別々となっても文化観光という面では積極的に関わっていきたいと考えています。

委員長 組織の垣根を越えてということで、ぜひとも連携をとっていただければと思います。他にご意見等あればお願いします。

F委員 新博物館1階の活用については、教育委員会が担っていただけるということになると、小学校・中学校が利用できる場所、非常に活用すべき場所になってくると思います。高校はどうでしょうか。高校生が博物館へ積極的に関わってくることがすごく大事な気がするが、いかがかでしょうか。

木下館長 これまでの学校利用については、小学校が中心で中学校がそれに続くということで、高校生の博物館利用には積極的ではなかったということ。これは課題の一つであると認識しています。博物館を学びの場として使っていただくため、高校生を対象とした事業の実施を検討するなど、積極的に進めていきたいと考えます。

委員長 ありがとうございます。他の委員の皆さんからご意見がないようでしたら次の議題に移ります。文化財指定の博物館資料についてと、過去の行事案内についてご説明をお願いします。

ウ 現博物館について（事務局による資料2の説明）

(ア) 文化財指定の博物館の収蔵資料について

(イ) 過去の行事案内について

エ 意見交換

委員長 木下館長からの説明でした。説明について、ご意見ご質問ありませんでしょうか。

A委員 とても詳しいお話でとても楽しく伺いました。博物館の収蔵資料は地味だとおっしゃいましたが、それをいかに磨くかということが博物館のミッションであると感じられました。とりわけ、農耕用具コレクション。こうしたモノを磨き上げて価値付けていく。要は価値創出的な空間としてのミュージアムのあり方を改めて

感じるどころです。質問になりますが、学生と話をしていると、例えばサブカルチャーのような、もっと新しいものも博物館のコンテンツになるのかなとか、僕らが身の回りに持っている一つ一つのものだって、将来的には、博物館に入るのだよとか、そんな話をするのですね。という点で興味本位の質問ですけども、松本市博さんで収蔵している資料で、非常に新しく面白いものっていうのは何かありますでしょうか。農耕用具がやはり、ピカイチでしょうか。

木下館長 新しい資料にはまだそれほど目を向けられていないところかなと思うが、古いものの延長線上で変わって来たという資料という視点では、幾つかあるのかなと思っています。全く新しいわけではないが、七夕人形を見ていると、昔は角材で作って、それが板になっていくと。その角材のものが打ち捨てられている状態。それを、カータリという名前で松本の人たちは呼んでいて、雨の日に川を渡すという、新しい伝説をつくって、それを伝えているということがある。まったく新しい話でなく恐縮ですが、新しい伝説のようなものを作って、古いものに価値付けをして残しているという例が松本ではいくつもみえると。

委員長 市民から、資料を集めれば面白いかなと思います。これは作品として価値があるのだというふうに市民が感じたものを集めて発表できるような機会もあると面白いかなと思いました。けれども、そこにその価値、どういう価値があるかっていう判定を誰がするのかということも踏まえて、また、博物館の方ですね協議を続けていただければと思います。他にいかがでしょうか。

E委員 改めてお話を伺っていて、語弊があったら申し訳ないのですが、地味だなんていうふうに思いました。ただし、私が興味あったのは館長さんです。館長さんの思いが伝わってくる中で、地味なものも何か楽しいじゃないかと思ってしまった節があって。これが、おそらく僕らがやるべきことなのかなと改めて思ったのですね。先ほど七夕の話もそうですけれども、そこまで詳しい話、私も実は知らなかった。そこに大きなヒントがあると思うのですね。それを、市民ワークショップなり、いろんな形で作り上げていって新しい文化として発信していく。というご説明がありましたが、それこそが、おそらくこの博物館が、成功するかどうかということなのかなというふうに思いました。これは雑談になるかもしれませんが、ふとよぎったのが、これ、私が携わっているところで言うと、松本山雅のホームゲームで七夕に合わせて、そこに来たら、七夕人形をつくれるブースができたなら、多分その認知度が一気に高まるかなとか、そういうようなことが浮かんだのですよね。そういったことがすごく大事だと改めて思ったので。館長さんのブースがひとつできたら面白い。

木下館長 最大限のお褒めの言葉をいただきまして恐縮です。サイトウ記念のもの(ミニTシャツ)が二つ並んで町の中に飾られて、七夕人形が同じ時期に出てくると、松本らしいなと見ています。七夕人形を知っているとより松本を楽しめる。気づいたことを人に伝えて、「そうだね」ってその人が楽しくできる。楽しいから繰り返しできるというのが博物館の目指すところかと思っています。

委員長 素晴らしいご発言ありがとうございます。他にいかがでしょうか。

B委員 博物館には 12 万点からの資料があり、それがその時々うまく出してもらうことは難しいと思いますが、例えば毎年のように NHK の大河にはいろいろな主人公がでてくる。真田丸で上田が盛り上がったように、大河に関係するもの「博物館にこういったものがあるよ」ということで企画をする。現在放送している渋沢栄一もそうだと思いますが、渋沢栄一は日本の経済発展の中で重要な位置付けだったけれども松本ではどうなのかと。今井五介が商工会の会頭をやって、松本の経済を発展させた。やっぱり歴史があるわけですね。そういったものをうまく組み合わせたい。いただいた企画展などができれば良いと思います。そのために申し上げたいのは、市の人事制度は比較的短い期間で職員が異動になることが多いものですから学芸員さんたちが育たないということ。育たないという語弊のある言い方かもしれないですけども。例えば、いろいろなことを覚えた学芸員が 1 年・2 年すると博物館から異動していなくなってしまう。また、1 からやり直しということが非常に多い。できれば同じシステムの中で出世していただけるような、また、意欲のある学芸員が頑張ってもらえるようなシステムを作っていただきたいなあと。それから、これからは文化観光の方も同じことが言えるのではないかと思うのですよ。そこら辺のコラボをどのようにするか。課題になるのではないのかと思っていますので、ご検討いただければと思います。

木下館長 本当に魅力的な学芸員は必要なのかなというふうに思っております。また、そういう職員がやる気になるように、できるだけ長く市民の皆さんと関わられるようにしていきたいと思います。

委員長 私からも一つ質問です。博物館に来たお客さんが学芸員の方に説明を求めたときに、1 人のお客さんに 1 人の学芸員がついて、今、館長さんが説明くださったように口頭で説明していただくということは、現在、そういった事をやってらっしゃるのでしょうか。

木下館長 積極的にやっているということはないですが、受付に声をかけられて求めがあれば、学芸員がご案内をさせていただく対応は当然しております。分館では、割合お客さんが少ないので、求められなくても案内をしていることもあります。また、市民学芸員が常駐してくださっている分館もあるので、職員ではなく市民学芸員が案内を担っている館もあります。分館それぞれで対応してもらっている状況ですので、それがすべて、どこに行っても展示解説ができるというふうにこれからしていければと思っています。

委員長 他に意見がなければ、次の議題に移りたいと思います。議題の 3 番、文化観光方面での 1 階活用につきまして文化観光部よりご説明があります。よろしく申し上げます。

オ 文化観光面での活用案について（事務局による資料 3 の説明）

カ 意見交換

委員長 ありがとうございます。小口課長さんからのご説明でした。いかがでしょうか。ご意見、ご質問等ありますでしょうか。挙手にてお願いしたいと思います。

A委員 詳しいご説明ありがとうございます。いろんな可能性を秘めたものであること

を再確認しつつ、お話を楽しく伺いました。その上でなんですが、空間としてウインドギャラリーがどう機能するかということが非常に重要だと。先ほど本棚のようなシェルフが示されていましたが、あれで本当にいいのか。失礼な言い方がかもしれませんが、いろいろ思っちゃいました。実際、あれに展示して維持していくというのは相当大変だと思います。もっと展開可能な、広がりのあるコンテンツを受け入れられるような方がいいのではないかとというのが率直な意見です。それからもう一つ導入展示のとなんですけれども、おそらくここが言ってみれば、デジタルコンテンツの活用とも直結する箇所だと思うのですが、絵を見た段階ではちょっとまだ寂しいというか、あの空間が本当に2点のコンテンツで、決まるのか、読みきれないという風に思いました。感想ですけどまずそこです。それから、4番目の運営についての提案というところも非常に重要なことだと思います。先ほど私の方から差し上げた運営形態の質問にも関わりますけれども、端的に申し上げますと直営か指定管理かという議論がどっかで出てくるのだろうというふうに認識しています。美術館での見解や、或いは先ほど申し上げた教育委員会と文化観光部の切り分けとか、非常に複雑な要素があるかと思いますが、やはりこの辺は、いかにいい空間が生まれるかっていうことを念頭に置いて、博物館をどう作るかという観点から、議論を詰められればと改めて思った次第です。コーディネーターについて、これ確かに重要だと思います。今の小口さんからのご説明の範囲だと、あくまでも1階のコーディネートってところが強調されていましたが、もっと松本市全体の文化芸術プロジェクトの、要はプロジェクトコーディネートとかプログラムコーディネートができるくらいの方があそこにほぼ常駐しているみたいなイメージの方がいいじゃないかと。あの1階を超えたところから、プログラムを作っていく方が面白いじゃないかなと思いました。以上です。

委員長 4点についてご意見をいただきました。まずは、ウインドギャラリーについて、いかがでしょうか。事務局お願いします。

千賀主任 おっしゃる通り、ウインドギャラリーが博物館の顔になるというふうに考えております。そこにずっと同じものが展示されていると、それこそ博物館はいつ来ても変わらないという印象を与えてしまいますので、更新を高めていくことは大切だというふうに考えております。ご指摘の通り、博物館職員だけ・博物館の資料だけで全て変えていくのは難しいところですので、先ほどの提案でもありました、地元の作家の作品を展示する。企業と連携して、PRをする場として活用していくというような運営方法を検討していきたいと考えています。

委員長 次の導入部の展示2点につきましてはいかがでしょうか。お願いします。

千賀主任 導入展示のコンセプトとしましては、当初は、ここが松本市全体のビクターセンターのようになって、その対面にあります総合受付の人的なサポートと併せて案内をしていくということを考えておりました。先ほどの提案の中にもありました、デジタルコンテンツの展開等につきましては、例えば講堂ですとか、交流学习室といったところが広い空間として確保できますので、そちらで展開をして、導入展示はあくまでも階段で上階へ上がってくる導線上にあるものですので、そこは切

り離してもいいのかなというのが私個人の考えで、感想として述べたところです。

A委員 エレベーターではなく階段で上がることが前提というか条件になっているのですよね。そこが、どれくらい機能するかということだというふうに思っております。すみません、以上です。

委員長 次に運営上の提案、直営もしくは指定管理も含めまして運営をどうしていくのかってことですけれども、事務局お願いします。

中原課長 新しい博物館につきましては、指定管理者制度も含めて検討しているものです。基本的には管理部門を指定管理。学芸部門については直営というようなスキームも、今現在検討しておりますけれども、分館を15館も抱えておりますので、そこも含めて全体として考えていかなければならないというふうに思っております。

委員長 4点目、コーディネーター、文化芸術コーディネーターの常駐などについてご指摘いただきましたけれどもいかがでしょうか。どなたかご発言ありますか。

教育長 教育長の伊佐治です。以前、文化観光部長の前任になる文化スポーツ部長を務めておりました。その関係で、総合的な文化芸術コーディネーターという発言がありましたのでお話をしたいのですが、実は松本市はご承知の通り、文化芸術に関しては割と先進的な取り組みをしている都市と言えらると思うのですが、その中で、市民の皆さんの芸術活動、音楽・美術ですとか、そういった市民活動をコーディネートして、若い方を育成していくという機能が弱かったのではないかと言われておりました。ちょうど文化芸術の部門でも計画を作っております更新時期になっておりますけれども、その中で出ました話がコーディネート部門・育成部門が必要だねということがありました。そういった松本市の流れの中でも、こういったことが必要だということはあるけれども、どういった人を呼ぶのか。例えば市民芸術館の串田監督や美術館館長というような、どなたかビッグネームを呼んでいく方がいいのか。それとも、それに適した人がどういう人であるべきなのかというのは、様々な要件があると思います。ですので、このことをきっかけに、皆さんでそのことを論議いただいて返答していく場になれば、私は大変ありがたいと思っております。よろしく申し上げます。

委員長 素晴らしい説明ありがとうございました。

A委員 今の話で納得しております。自治体の規模によりますけれどもやはり全国的に、いわゆるアーツカウンシルといった動きが出てきている。そうしたものを松本版としてどれくらい、名前つければいいのかというものではないですけれども、機能させていくかということを念頭に置いた一体の利活用ということができれば、重要な展開になるのではないかと認識しています。期待しております。

委員長 はい、ボールが投げられましたので、ぜひ受け止めていただければというふうに思います。それ以外にいかがでしょうか。よろしく申し上げます。

E委員 おそらく文化観光、もしくはビジネスっていうものをドッキングさせて1つの力にしていこうという今の日本の流れっていうのは、これは必然的な流れだと思っております。ただし、その日本という国自体が、おそらくそこに関して不得意な土壌や性質があるっていうのを私はずっと思っていて、これ、詳しい話をするとは

ら、多分このアートとビジネスのドッキングっていうこと自体の、クリエイティブさに関しては、もう日本はイギリスから 25 年から 30 年ほど遅れてですね、もっと言うと、クールジャパンですずっとやっていたことなのですがこれに関しても、もうアメリカから 50 年以上遅れて始まっている。という流れからすると、日本という国の持っている性質というか確執というかですね、こういったものが、いろいろこういったものに対して、まだまだ始まったばかりということが一ついえると思うのです。それから、誰か連れてきたら「絶対はまる」という人はなかなか見つからないというのが、現状だと思っています。これは、いいとか悪いとかって言うのではなくて、なかなかそれが行政単位で動いている。こんなものに対して、そこに、企業であるとか、お金の部分であるとか、アイデアっていうものを被せようとすると、非常にこれはやっぱり難しい部分があるなっていうふうに改めて思うのと同時に、これこそが「松本モデル」、こういうものを一つ確立するぐらいの気持ちが必要なのかなというふうに思うのです。先ほど山雅の話をしたのですが、私も山雅を立ち上げる中で意図的にやったことがあって、それは何かというと、山雅って、実は見に行くお客さんと運営する私たち、この 2 者だけではないのです。私たち何をしたいかということ、応援する人たちの居場所を作って、それを運営するボランティアの居場所を作って、それぞれ主役になりえるような環境を整えていったのです。これをやることによって、彼らにとったら、関わり方は違うけれど「自分が山雅を担っているのだ」という意識の中で動いていくというソフトをまず意図的に作るということを私の中でしてきたことです。こういったことが、実はそこまで知らないと一つ一つぶつ切りになるのですけれども、でも、実際に中に入っていくと、みんなが何故山雅に熱狂するのかということ、自分のチームだと思っているのです。だからそこが、おそらくここで言うマイ博物館といったときに、どういう立場でこの博物館に関わるかということは非常に大事な部分であって、これこそが、もしかしたら松本モデルの博物館になりうるヒントになるのかな、なんてこと思いながら、今日は最初の会議なので、そういう意識を持ちながら次に望みたいと思っています。

委員長 確かに、どう、一人一人が関わるかっていうところですね。特に市民が自分たちで博物館を作り上げていくのだからって意識をどのように実践の中で作っていくのかっていう、とても素晴らしいご意見だったと思います。これからこの中の議論をしていけたらなというふうに思いますが、今の段階で事務局の方から何かご意見等ありますでしょうか。

小原部長 今日是最初の一回目ということで、博物館から建設の概要ですとか展示の内容ですとか詳しく伝えてきたと思いますけれども、今回の問題の一つは、博物館があの場所に、中心市街地のど真ん中に建て、実際に人の流れですとか、回遊性ですとか、そういったところの一翼を担う場所に建つというのが大きなことなのだと思います。ですので、一般的にただ単に、全く関係ない場所に博物館を建てるのであれば、そこまで、博物館の 1 階をどうしようかという議論にはならなかったかもしれない。ただ、あそこにある以上当然、街の中のいろんなものをつなぐ機能が博物館

の果たすべきものなのだと思います。ですので、2階3階というのはしっかり展示をしていただいて、素晴らしい企画をしていただければと思うのですが、1階は割と自由度が高くて、だけど、さきほどの説明を聞いていると、外から中の賑わいが見えまずと説明ありましたけれども、実際に賑わいを創造できるかどうかという点だと思うのですね。実際にいろいろな展示をしていますといったものも、単に展示をしているだけ、クラフトが展示されているだけということが賑わいにつながるのだろうかということを感じています。そこにはどうしても仕掛けが必要で、今日いくつかヒントが出たと思うのですけれども、例えば館長のお話、非常に面白かった。そこへ人が通うことによって、すごく展示してあるものに深みが出るだとか、聞いた人たちが興味わいてきたということもあるでしょうし、いろいろな人と関わって、動きがあって、話があって、ということがないと、なかなか賑わいを作れないかなというふうには思っています。先ほど小口課長の方から街中アートプロジェクトというのをやりますという話がありましたが、アートプロジェクトの趣旨は、いままで美術館や美術館や音文ホール。いろいろなところで芸術文化の営みを一生懸命やってきました。これを何とか、日常化できないか。街に出たら何かしらないけれど松本の街って、あちこちで音楽やっていたりだとか、何か演劇やっていたりだとか、何かそういった回数がちょっと増えて、何かやっぱり松本って芸術文化の都市。なんというか、そういう賑わいができないかなと。そういうロジック。そうやって考えると、博物館の1階、それからその前も歩行者天国になるかもしれない。あのスペース辺りは、そういった活動を展開する場所としても使えるのではないかな。そういったことを思って聞いておりました。いずれにしましても、1階の活用といっても、ハード的には制限をされています。ですが、ソフト面では、今日いくつかお出ししましたけれども、まだまだ沢山、皆さまの中にアイデアがあると思いますので、ぜひ何回かの考える時間ではありますけれども、多くの意見出していただいて、何か良い提案できればと思います。

委員長 是非とも賑わいがつくれるような博物館運営をお願いしたいというふうに考えております。いかがでしょうか。今日はまだ発言されてらっしゃらないC委員いかがでしょうか。

C委員 なかなか今、ついていけなくて実際には、先ほどE委員もおっしゃっていたのだけれども、日本は岐路に立っているというか、ある意味出発点ではないかということもあるし。1階の活用案に関してあまり複雑にして説明が必要なことになる、利用というのは難しい。だから、感覚的に「ああ、面白れえじゃねえか！」というところに人が集まるような感じになれば、何々というような説明が必要なことというのは難しいのですよね。だから「面白いね」という単純なところに行きつくような。仕掛けが見えないようなところで話をしていければなというふうに思いました。

委員長 愛のあるご意見として、受けとめさせていただきたいと思います。他にいかがでしょうか。もう時間がちょうど、3時半となってしまうけれども、これは言っておきたい、1回目にこれだけは言っておきたいということがございましたら、ぜひご発言いただければと思いますが。はい、お願いします。

F 委員 皆さんのおっしゃっていただいたことそのままなのですが、改めて先ほどの館長さんの話もすごく興味深く聞きました。なんせ、そんなに勉強してこなかった中で、やっぱり小学校中学校、高校と同じような歴史の勉強しかしていないようなイメージで、歴史も地産地消があってもいいのではないかと非常に思っていて、そういったことをやっぱり地元の人たち若い人たちが、しっかり勉強して、特に高校、大学生たちが夏休みの間、小学生に博物館で教えるっていう、そういった主体性。10年たてば、彼らがもう20、30代になるわけですから。やっぱりその辺の仕掛けってすごく大事だなって感じました。僕なんか紙切れとおっしゃったところの、あれを見てですね、これはパソコンで打ったのかどうなのかって思うぐらいの字で、どうやってああいう字を書けるように勉強したかということに行きついたわけですね。アートであって、教育であって。

それから地図ですよ。あれほど正確な、Google Map っていないのだから、ということから今の子どもたちはつながってくると思うのですけれども、じゃあ、どうやって測ったのだらうという。そうすると、話を聞きながら、昔のもの、農業の工作物などがあって、今のようなマシプロダクションのような法律ばかりではない、SNSばかりではない世界で、CO₂を出さず人間は生きてきたという。そうするとSDG_sだとか、これから行かなければいけない方向のヒントにもなりうるなという。つなぐという言葉、我々はマーケティングが非常に下手だと思うのですよ。日本という国は。持っているものはたくさんあるのに、アピールの仕方が非常に下手と、そういうふうに思った。ポイントとしては学生の人たちをすごく絡めないともったいない。これだけは言いたいというのはそこです。

委員長 貴重なご意見をちょうだいいたしました。はい、よろしいでしょうか。では、本日予定されている議題は終了いたしましたので事務局に進行をお返ししたいと思います。

百瀬補佐 はい。委員長、各委員の皆様、専門的かつ多方面の立場からご意見ありがとうございました。続きまして、議題の6番、その他でございます。何かありますでしょうか。

中原課長 本日はありがとうございました。第2回を次第にも書いてございますとおり非常にタイトですが、今月下旬から来月上旬の間で、できれば、委員長のスケジュールを踏まえまして、メール等で調整をさせていただきたいというふうに考えておりますのでよろしくお願いいたします。次回は、「あの場所にできる」という、「あの場所」をご覧いただいたあと、工事現場を見た後にご意見いただければなというふうに思っております。以上です。

百瀬補佐 はい、それでは特に何かなければ以上をもちまして第1回松本市基幹博物館1階活用市民会議を終了いたします。本日はありがとうございました。